

小学生のエンゲージメントを高めるための授業の工夫

Improving Classes to Increase Elementary School Student Engagement

大久保 光弘*, 齊藤 想能美**, 池田 誠喜***

*鳴門教育大学大学院 高度学校教育実践専攻

**鳴門教育大学附属小学校

***鳴門教育大学

OOKUBO Mitsuhiro* SAITO Sonomi** and IKEDA Seiki***

*Naruto University of Education, Graduate School

**Elementary School Attached to Naruto University of Education

***Naruto University of Education,

抄録：本稿は、OECDにおけるEducation2030プロジェクトを整理した中で、VUCA(volatile, uncertain, complex, ambiguous)「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代の中に生きる子どもたちに必要な力としてエージェンシーの獲得が課題を取り上げている。

そこで、本報告では、能力としてのエージェンシーの獲得を目指し、学習活動を通してフロー体験をすることにより児童のエンゲージメントの維持向上を図る授業実践を行なった。方法としては、授業の中でフロー体験を繰り返すことで、学習の楽しさ・面白さ・喜びなどを感じ自信に繋がる授業を目指した授業を展開した。

結果、授業においてフロー状態を体験することにより、児童のエンゲージメントの維持向上につながる事が確認された。

キーワード：エンゲージメント、フロー体験、エージェンシー

Abstract: This paper summarizes the OECD's Education 2030 project and discusses the acquisition of agency as a necessary power for children living in an era of VUCA (volatile, uncertain, complex, ambiguous) has become an issue. Therefore, in this report, with the aim of acquiring agency as a skill, we conducted a classroom practice that aims to maintain and improve children's engagement by providing flow experiences through learning activities. As a method, by repeating flow experiences in class, we aimed to develop classes that would lead to students feeling the fun, interest, and joy of learning, which would lead to self-confidence.

The results confirmed that experiencing a flow state in class led to maintaining and improving children's engagement.

Keywords: engagement flow experience agency

1. 問題と目的

1. 生徒指導の目標と今日的課題

社会の情報化とグローバル化がますます進む中、国際情勢は急激に不安定な状態に陥り、これまで予測困難な時代に入っていると言われる中で、現在では本当にそれを実感する状態となっている。この様な状態について、白井(2020)は、OECDにおけるEducation2030プロジェクトを整理した中で、VUCA(volatile, uncertain, complex, ambiguous)の頭文字をとった言葉で「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代となるという意味を紹介している。具体的には、①Volatile(変化のしやすさ)は「技術の発展など、我々を取りまく変化のスピードや範囲は、常に加速している」こと、②Uncertain(不確実さ)は「物事や状況が恒常的に変化し、将来何が起きるのかを予測

することも難しくなっていること」、③Complex(複雑さ)意味の増加など、様々な物事が、単一の要因ではなく、相互に絡み合っている多数の要因によって生じるため、より複雑化したり、解決策を見つけるのが難しくなって生じるため、④Ambiguous(曖昧さ)物事の意味や帰結が曖昧になり、明快な意思決定を行うのが難しくなっていることである。

このような予測困難な時代と言われる中で、今後の未来を背負う子どもの状況として、自己に対する満足が低いことが指摘されており、郭・田中・任・史(2018)が古荘(2009)の「国際比較調査では日本のこども・若者はアメリカ、中国、韓国などの子どもと比べて自己評価が低く、自己肯定感も低いことが報告されている」との指摘を紹介しながら、自己肯定感の低い子どもが増加していることを述べている。さらに、河越・岡田(2015)の「自己肯定感の低い子どもが学校や社会のなかでうま

く適応できない傾向にあることが教育や医療の現場から指摘されている」との指摘をあげ、自己肯定感の低い子どもの増加から危惧されることを述べている。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2009）の示した小中学生の状況を具体的に示すと、自分に自信があると回答した割合が平成11年と平成18年を比較すると小学生男女とも低くなっている（図1）。

また、内閣府（2014）の『平成26年版子ども・若者白書』においては、子どもの自己肯定感が低い状況は青年期への移行に伴い更に低下する傾向にあり、自分自身に満足している割合は、スウェーデンとともに他国と比較して低いことが示されている（図2）。

この様に、小学生の段階からみられる自己肯定感の低さが青年期にかけて更に低下する傾向があることを踏まえると、小学生の段階において、自己肯定感を高めることは喫緊の課題と言える。

近年の社会状況と子どもの状況の中、OECDにおいても、学習の枠組みとして示されたラーニングコンパスの中核的概念としてエージェンシーが紹介されている（白井，2020）。エージェンシーとは「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力（the capacity to set a goal, reflect and act responsibility to effect change）」として定義されている（白井 2020）。

一方、日本においては提要が改定され、生徒指導とは、児童生徒が社会の中で自分らしく生きることが出来る存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える

教育活動であることが示されている（生徒指導提要，2022）。生徒指導は、児童生徒が自身を個性的存在として認め、自己に内在しているよさや可能性に自ら気づき、引き出し、伸ばすと同時に、社会生活で必要となる社会的資質・能力を身に付けることを支える働き（機能）がある。これらは整理されており、学校教育における生徒指導においては児童の自己指導能力の向上を目指すことになる。自己指導能力とは、児童生徒一人ひとりが、深い自己理解に基づき、「何をしたいのか」、「何をすべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力である。（文部科学省，2022）

日本の生徒指導の機能と目的である自己指導能力とエージェンシーの概念を照らし合わせると、非常に似ている部分が多く、白井（2020）の述べる2030年を目指す児童生徒の在り方としてエージェンシーを取り上げ、エージェンシーを育てるために生徒指導の機能を活用することが有効だと考える。ただし、Skinner & Pitzer（2012）によると、エージェンティックに活動する能力そのものを指しており、それを獲得するための関連ある概念としてエンゲージメント概念を紹介している。エンゲージメントとは、主体的かつ積極的な関与の状態を示す概念で動機や認知の状態による行動や感情そのものを指しており、エージェンシーという能力を獲得するためにエンゲージメントという心理的概念を用いることが有効だと考

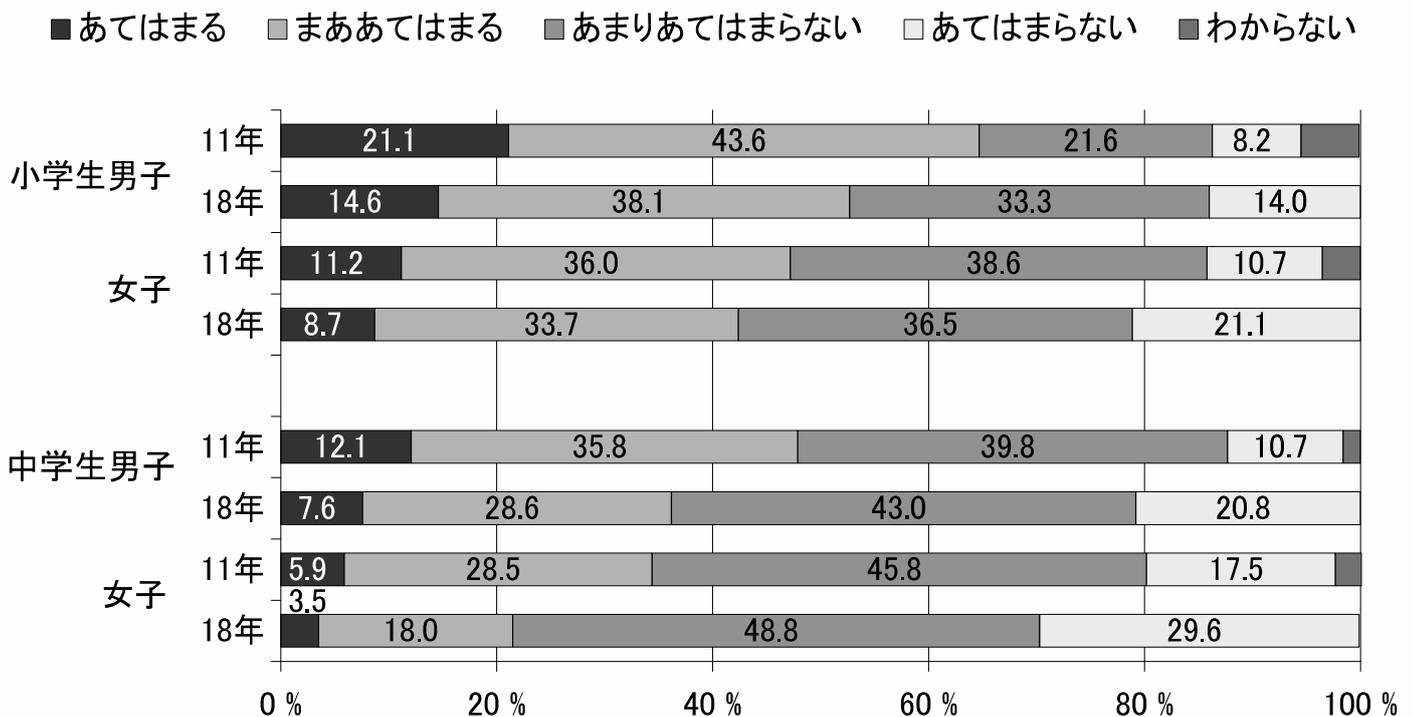


図1 「自分に自信があるか」についての小中学生の回答
（出典：国立教育政策研究所，2009 生徒指導資料第1集（改訂版））

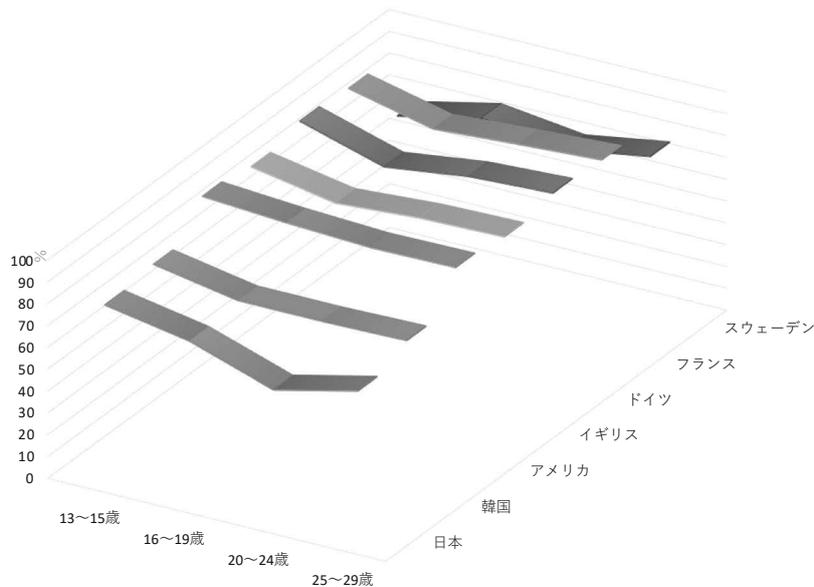


図2 「自分自身に満足している」(2)年齢階級別
出典:内閣府「平成26年度版子ども・若者白書」

	13～15歳	16～19歳	20～24歳	25～29歳
日本	79.3	72.3	59.4	68.4
韓国	81.5	74.4	74.3	75
アメリカ	96.2	93.5	91.6	92
イギリス	93.3	86.2	88.8	89.6
ドイツ	97.8	86.3	91.4	93.3
フランス	96.4	87.3	89.8	92
スウェーデン	67.3	75.8	70.9	77.2

えられる。では、児童をエンゲージメントの状態にするための方法はどの様なものが考えられるだろうか。池田(2023)は、エンゲージメントの状態を作り出すためには、①自律神経をしっかりと機能できる様にするリカバリーと毎日の身体的・心理的・社会的な回復、②フロー体験、③ポジティブ感情を上げている。フロー体験は、Csikszentmihalyi(1975)により提唱されたフロー理論に基づくもので、情動面からアプローチした動機づけ理論の代表例である。フローとは「一つの活動に没入しているので他の何ものも問題となくなる状態」と定義されている(Csikszentmihalyi, 1996)。フロー体験は、内発的に動機づけられた自己の没入感覚をともなう楽しい経験を指し、楽しい時間であり、時間を忘れ周りが気にならないほどの没入感が特徴である。学習や文化・スポーツ、係活動など学校生活でフロー体験を創出することが可能であるため、エンゲージメント状態を教師が創出することが可能だと考えられる。

授業におけるフロー体験創出に関連することとして、山田・西村・池田・前田(2017)は、「有能感」「関係性」「自律性」が、直接的もしくは間接的に「フロー体験」へ正の影響を与えており、「有能感」と「関係性」は直接的もしくは間接的に関連し、「自律性」は直接的に「フロー体験」に関連するという仮説モデルを支持し

ている。基本的心理欲求尺度の下位尺度3因子に比較的強い相関が見られることから、それぞれの因子が影響し合い、欲求充足の度合いが高まることを指摘している。

以上のことから、本研究では、小学生がエンゲージメントを獲得することを目標として、エンゲージメントの状態を維持もしくは向上する授業実践の取組を通して、その成果と課題について検討することを目的とした。

II. 方法

1. 対象

公立小学校 第6学年(全87名)3クラス

2. 研究方法

本研究では、社会科の授業を通して、単元及び各回の授業の目標に近づく教科指導に加えて、児童が授業でフロー体験をすることにより、エンゲージメントの状態を維持もしくは向上を図る。そのため、構想した授業の前後にエンゲージメントの状態を測定し、指導過程の妥当性及び成果と課題について検討する。

1) エンゲージメントの測定

本実践では、児童のエンゲージメントの状態を斉藤・

池田（2023）の小中学生用スクールエンゲージメント尺度（表1）を用いて測定した。本尺度は、3つの因子（感情的エンゲージメント、行動的エンゲージメント、認知的エンゲージメント）を測定し、その因子の得点を合計した得点としてスクールエンゲージメントの状態を測定する標準化された尺度である。

2) フロー状態の測定

授業の中でフロー状態を体験したかを調査するため、フロー状態を表す没入・熱中・夢中状態を①授業は楽しく取り組めた、②授業中は時間を忘れるほど夢中になることがあった、の2つの質問で授業の終わりに回答した（表2）。

Ⅲ. 学習支援の工夫

1. フロー体験を促す工夫

1) 個別最適な学び

フロー体験を創出するには、児童個々ができると授業の課題が適度に合っている必要がある、難しすぎてできない、簡単すぎて飽きてしまうなどの状態を作らずに、自分自身が関心を持って進めていける教材や学習方法が準備されなければならない。そこで、個別最適な学びを目指して授業を構成した。また、個別最適化の学習の工夫は、山田ら（2017）が示した基本的心理欲求である有能感、自律性の充足を念頭に置いた。

表1 スクールエンゲージメント測定項目

項目
【第1因子】 行動エンゲージメント
1 __わたしは、授業や学校生活をよりいいものにするために自分の考えを友達に伝える
2 __わたしは、係や委員会行事など一生懸命取り組んでいる
3 __わたしは、学校で何か問題があると思ったときは、解決するために先生や友達の意見を聴いてみる
4 __わたしは、授業に一生懸命取り組んでいる
5 __わたしは、授業中自分の勉強に役立てるために質問する
【第2因子】 感情エンゲージメント
6 __わたしは、学校で新しいことを知ったり学んだりすることにワクワクする
7 __わたしは、学校でみんなに会えるのがうれしい
8 __わたしは、学校でやらなければいけないことは最後までしている
9 __わたしは、学校で友達と話したり遊んだりするのは楽しい
10 __わたしは、自分の学校のことを大切に思っている
【第3因子】 認知エンゲージメント
11 __わたしは、授業でやったことを家でもおさらいしている
12 __わたしは、学習で知りたいことは進んで本やインターネットなどで調べている
13 __わたしは、学習でのまちがいについてなぜ間違ったのかをよく考える
14 __わたしは、学校でうまくいかないときがあればやり方を工夫して取り組んでいる

表2 フロー体験測定項目

項目
1 社会（体育）の授業は楽しく取り組めた
2 社会（体育）の授業は時間を忘れるほどに夢中になって取り組めた

有能感の充足に関わり、学習への意欲づけとして、授業の導入時に関心を高めるための工夫を行なった。特に、内容によって興味を持つ児童が違うので、予想される関心の高さに合わせた導入方法の工夫を全授業において実施した。自律性の充足に関わり、学習活動で取り組む課題に対して適切な難易度が設定されていることに留意し、全員が今持っている力で学習を開始することが可能な課題の設定を心がけた。ヒントカードを用意して個別支援に対応できるようにした。一方で、課題が容易で学習活動が途中で飽きてしまうことにも留意した。

2) 協働的な学びの機会の創出

山田ら（2017）が示した基本的心理欲求のうち、関係性の充足の工夫として、協働的な学びの機会を毎回の授業で設定した。協働作業の形態は、ペア、グループ、一斉学習でのシェアリングなど、多様なスタイルを適宜取り入れるよう心がけた。

2. 単元計画と授業計画

1) 社会の単元計画

表3に社会科の単元計画を示す。

2) 社会の指導計画

1時間単位の指導計画の一つを例として示す（表4）。

Ⅳ. 成果と課題の検討

1. フロー体験

本授業の取組の様子について、フロー体験の状態を児童の振り返りの採点から調査し、分析した。調査手続として、表3に示した質問項目2点について、「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点として、授業単元6回の授業時の終わりに毎回タブレットにより個々に回答を求めた。

1) 結果

実施した6回の授業でフロー体験が生じた授業になったかを検証した結果、質問1の6回の授業のそれぞれの平均が4.42～4.59、標準偏差は.78～1.33であった。質問2の6回の授業のそれぞれの平均は4.30～4.68、標準偏差は.76～1.32であった。6回の授業の質問1の平均は4.61、標準偏差は.1.02であった。質問2では、平均は4.52、標準偏差は.1.03であった（表5）。

2) 考察

実施した6回のどの授業においても、平均4を超える結果であり、フロー体験が生じた結果が示された。質問

表3 社会の単元計画

回	内容	本時のねらい	○主な学習活動／◆学習内容	本時の学習活動	評価規準/評価方法
1	都市のにぎわいと人々の楽しみ	江戸の町のにぎわいに着目し、江戸時代の文化や学問についての学習問題をつくり、学習の見直しを立てる。	○江戸のまのちにぎわいや人々の様子から、この時代にどのような文化や学問が生まれたのかを調べていく学習問題をつくり、学習計画を立てる。 ◆大都市を中心に人々が力を付け、新しい文化を楽しんでいること。	①「黒代勝覧」を読み取り、気づいたことや考えたことを発表し合う。 ②江戸時代の都市の様子や経済の発達について調べる。 ③豊かになった人々が生み出していった文化や学問について調べていく学習問題をつくり、学習計画を立てる。	【思判表】日本橋のにぎわいの様子から、間を見出し、学習問題として表現している。(発)(ノ) 【態】学習問題について、予想や学習計画を立て主体的に追究しようとしている。(発)(行)(ノ)
2	活気あふれる町人の文化 ＜指導計画 本時＞	歌舞伎や浮世絵などを調べ、江戸時代の町人文化の特徴を捉える。	○歌舞伎を楽しむ人々の様子や浮世絵などから、この頃に生み出された文化の特徴をつかみ、人々に親しまれた理由を考える。 ◆江戸時代には歌舞伎や浮世絵などが生み出され、人々の人気を得たこと。	①「歌舞伎を楽しむ人々」の様子から、歌舞伎に対する人々の思いを考える。 ②歌舞伎や浮世絵を例に、この時代に生み出された文化について調べる。 ③歌舞伎や浮世絵がさかんになった理由を考え、江戸時代の文化の特徴をまとめる。	【知技】江戸時代に生まれた文化の特徴を、時代背景と関連付けて捉えている。(ノ)
3	今につながる江戸の文化	江戸時代の人々の楽しみを調べ、江戸時代の文化と今日の暮らしや文化とのつながりに関心をもてるようにする。	○浮世絵や写真から、江戸時代の人々の楽しみを調べ、この頃に生み出された文化が現代にも受け継がれていることを理解する。 ◆江戸時代には人々の楽しみが生まれ、現代の暮らしの中に受け継がれていること。	①新しい文化を生み出す背景となった江戸時代の社会の様子を調べる。 ②浮世絵や写真から、江戸時代の人々の楽しみを調べる。 ③江戸時代に生まれた文化が現代まで受け継がれてきた意味を考え、話し合う。	【態】調べたことをもとに、江戸時代の文化と今日の自分たちの生活との関わりを考えようとしている。(発)(ノ)
4	文化を支えた産業と交通	江戸時代の人やものの動きを調べ、産業の発展に伴って流通網が急速に整備され、人々の暮らしが変化したことを捉える。	○江戸時代の交通や産業の発達について調べ、人々の暮らしの変化との関係について考える。 ◆交通や産業の発達によって、人々の暮らしが変わっていったこと。	①浮世絵や地図から、江戸や大阪を中心として日本各地が陸路・海路で結ばれ、流通がさかんになったことを読み取る。 ②農村での生産や暮らしの様子を調べる。 ③流通が発達し、生産力が高まることによって人々の暮らしや社会の様子がどのように変わったのかを考える。	【知技】浮世絵や地図から、交通網が発達したことや、それに伴って流通がさかんになったり人々の暮らしが変わったりしたことを捉えている。(ノ)
5	新しい学問	「解体新書」の作成や伊能忠敬の地図づくり、本居宣長の業績などを調べ、江戸時代の新しい学問の特徴を捉える。	○「解体新書」や伊能忠敬の地図作成の過程、本居宣長の業績を調べ、新しい学問を求める人々の取り組みを捉える。 ◆江戸時代には、蘭学や国学などの新しい学問が起こったこと。	①2枚の人体図の比較や解剖の見学の様子の想像図から、気づいたことを話し合う。 ②「解体新書」が出版された経緯や、伊能忠敬、本居宣長の業績を調べる。 ③江戸時代に起こった新しい学問とその影響についてまとめる。	【知技】江戸時代に起こった学問の特徴を捉えている。(発)(ノ)
6	人々と学問、新しい時代への動き ＜まとめる＞	寺子屋や藩校の広がりや百姓一揆や打ちこわしの増加などを調べ、教育の広がりや人々に与えた影響を捉える。 また、調べたことをまとめ、江戸時代に町人の文化や新しい学問が生まれ、人々に広まったことを捉え、その背景や影響を考え、表現する。	○江戸時代の寺子屋や藩校の広がりや百姓一揆や打ちこわしについて調べ、幕府を取り巻く環境の変化により人々の幕府に対する不満が高まった、江戸時代には寺子屋、藩校、私塾がくわられ、教育が広がっていったこと。幕府の飢饉や外国への対応に対して人々の不満が高まったこと。	①「寺子屋の様子」から、江戸時代の教育の様子を読み取る。 ②寺子屋や藩校、私塾でどのような教育が行われていたのかを調べる。 ③打ちこわしや百姓一揆のグラフなどから、江戸幕府に対する人々の不満が広がっていたことを読み取る。 ④教育の広がりや幕府を取り巻く環境の変化が世の中に与えた影響について考える。 ⑤「まとめる」(P162)も活用して、本単元の学習をまとめる。	【知技】江戸時代に町人による文化や新しい学問が広まったことを理解している。(発)(ノ)(テ) 【思判表】江戸時代に生まれた文化や学問について社会の変化と関連付けて考え、表現している。(発)

1の授業が楽しかったというフロー体験を生じるための必須の要素は満たされていたと考えることができる。一方で、標準偏差は.78～1.33と少しではあるがバラツキが生じている。特に、後半は1を超えているため、同単元を進めるにあたり、難易度が増したり、内容が退屈になったりするなど、フロー体験を生じるためのマイナス要因について留意する必要があると考える。

質問2の結果からは、どの授業においても、平均4を

超える結果であり、フロー体験が生じた結果が示された。質問1と同様の夢中になるというフロー体験を生じるための必須の要素は満たされていたと考えることができる。標準偏差の値は.76～1.32であり、質問1と同様に単元を進めるにあたりフロー体験を生じるためのマイナス要因について留意する必要があると考える。

表4 社会 授業計画例

時間	ながれ	学習活動	フロー体験の工夫	○指導上の留意点 ☆評価
5分	はじめ	①「熙代勝覧」を見て、気が付いたことをオクリンクに書く。 ② いろいろな文化があることに気づく	個々の興味、関心を高める教示	○色々な文化があることに気づかせる。
江戸時代にはどのような文化が生まれたのだろうか。				
20分	なか	③ 調べ学習（含む協働学習） 1人で調べ学習を行う児童・ペアで調べ学習を行う児童・グループで行う児童・教科書を使う・資料集を使う・ICTを使う児童など自分にあった学習方法を見つけて行う。 ④ 調べたことを共有する。 児童が調べたことを黒板に張り出したり書いたりする。自分たちで黒板を完成させるように促す。	【個別最適化学習】 学習形態の選択 ・個人・ペア・グループ 学習ツールの選択 ・教科書・資料集・ICT	○児童の言葉でめあてと問題を作る。 ○問題が難しくて進まない児童にはヒントカード等で個別の支援にあたる。 ○自分に合った調べ方が選択できているか確認する。 ○児童が主体的に動くように支援する。
15分		⑤ まとめ		
江戸時代には、大都市で町人が中心となって歌舞伎、浮世絵などの新しい文化が生まれ出され、人々の楽しみとして広がった。				
5分	おわり	⑥ ふりかえり		☆江戸時代に生まれた文化の特徴を、時代背景と関連付けて捉えている。【知識・技能】 ○ICTを使ってふりかえりをする。

2. エンゲージメント

エンゲージメントの状態を測定するために、児童に単元授業の開始前と終了直後に表3で示した小中学生用スクールエンゲージメント尺度を用いた調査を実施した。対象は108名、そのうち、欠席等で2回の調査に参加できなかった児童を除く105名を分析対象とした。調査手

続として、表3に示した質問項目2点について、「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点として、タブレットにより個々に回答を求めた。

表5 フロー体験測定結果

授業回	1	2	3	4	5	6	平均
質問1							
平均	4.78	4.73	4.59	4.42	4.57	4.57	4.61
標準偏差	.74	.88	1.00	1.33	1.10	1.10	1.02
人数	106	105	104	100	103	103	
質問2							
平均	4.75	4.68	4.51	4.30	4.43	4.42	4.52
標準偏差	.76	.89	1.01	1.32	1.10	1.09	1.03
人数	106	105	104	100	103	103	

1) 結果

スクールエンゲージメント尺度調査を実践授業の前で行い、対応のあるt検定により分析を行った。結果を表6に示す。

スクールエンゲージメントを構成する3つの因子及びスクールエンゲージメントに事後の得点が有意に高い結果となった。

2) 考察

感情エンゲージメント、行動エンゲージメント、認知エンゲージメントの3要素とも事後得点が有意に高くな

っていることから、児童が授業でフロー体験をすることにより、エンゲージメントが高まる可能性が見出された。

表6 スクールエンゲージメント調査結果

	事前 n=106		事後 n=106		自由度	t値
	M	SD	M	SD		
感情エンゲージメント	18.53	8.53	21.96	4.81	105	-3.48 ***
行動エンゲージメント	17.81	8.2	20.68	4.61	105	-3.14 ***
認知エンゲージメント	13.34	6.3	15.35	3.66	105	-2.82 ***
スクールエンゲージメント	49.68	22.63	57.99	12.57	105	-3.25 ***

3. 成果と課題

本実践は、小学生がエージェンシーの獲得を目標として、エンゲージメントの状態を維持もしくは向上する授業実践の取り組みの成果と課題を検討することである。

今回、エンゲージメントの状態を維持向上させるための授業構想として、フロー体験を授業で経験させることに主眼を置いた。フローが生じることにより、エンゲージメントの要素を満たすことが推察され、改めて言及するまでもないが、教師は児童一人一人全員が夢中になって楽しく取り組める授業づくりを目指さなければならないことが明確になったと考える。本実践では、フロー体験を生じさせるために基本的心理欲求を充足する学習活動を構想した。このことは、近年の学校教育でも示されている個別最適化された授業として役立つ内容であった。

授業が興味深く楽しい時間となることで、自信につながり、それが自己肯定感の向上と結びつき、様々な場面に主体的かつ積極的に関わる行動に結びつくことが期待される。さらに、協働的な学びの機会を設定することを取り入れることで、仲間意識の向上に繋がるとともに学習空間がより安全・安心な場となり、積極的に学習に取り組める効果が得られたと考えられる。

一方で、本研究の課題として、単元が進むにつれてフロー体験の度合いにばらつきが生じており、授業の難易度や興味の持続、達成感の獲得など、個人差に応じた対応についての改善が必要である。

文献

Csikszentmihalyi, M. (1975). Beyond boredom and anxiety. San Francisco : Jossey-Bass. Csikszentmihalyi, M. (1990) Flow – The Psychology of optimal experience. New York: HarperCollins.
古荘純一 (2009) 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか：児童精神科医の現場報告 光文社新書。

池田誠喜 (2023) スクールエンゲージメントと生徒指導, 学校心理士会報, 第 15 号, 20-29.
郭芳・田中弘美・任セア (2018) 子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究—京都子ども調査をもとに—, 評論・社会科学 (126), 同志社大学社会学会, 15-32.
河越麻佑・岡田みゆき (2015) 大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因.
国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2009) 生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導—データに見る生徒指導の課題と展望— <https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/1syu-kaitei/1syukaitei.htm> (最終閲覧日 2023 年 10 月 21 日)
三輪聡子 (2020) 道徳の時間における児童の資料理解 風間書房.
文部科学省 (2013) 今後の道徳教育の改善・充実方策について (報告) ~新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために~ https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/houkoku/icsFiles/afield/file/, (最終閲覧日 2023 年 8 月 12 日)
文部科学省 (2022) 生徒指導提要 https://www.mext.go.jp/content/20230220mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf (最終閲覧日 2023 年 10 月 22 日)
内閣府 (2014) 平成 26 年版子ども・若者白書.
内閣府 (2018) 平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査.
斉藤想能美・池田誠喜 (2023) 小中学生用スクールエンゲージメント尺度の作成, 日本教育大学協会研究年報, 第 41 集, 35-145.
白井 俊 (2020) OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来: エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム ミネルヴァ書房.
Skinner, E. A., & Pitzer, J. R. (2018) Developmental Dynamics of Student Engagement, Coping, and Everyday Resilience. "Research on Student Engagement Handbook of Research Student Engagement. Christenson, S. L. et al (ed.) Springer Science + Business Media. 21-45.
山田あずさ・西村公孝・池田誠喜・前田洋一 (2016) 保健体育授業におけるフロー体験と基本的心理欲求の充足の関連, 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 第 31 号 57-64.